

禁 忌 語 (2)

萩 田 時 子

人間社会のいつも変わらぬ特徴の一つは、言葉の迷信である。それは共同社会が到達した文明の程度に応じて非常に違つた形をとりはするが、その根は至る所に張られ、いつも同じ抜き難い力、即ち書かれたり話されたりする語の魔力を信ずる心のうちに下ろされている。未開人の間のタブーや言葉忌みの複雑な体系、古代エジプトのケルン、即ち語の神格化、およびバラモン教やユダヤ教やイスラム教に見られる神名の忌避、西欧人の忌み言葉（婉曲法）、いい廻し、また言葉の慎しみ—この様な又その他無数の事例はみな、'nomina'（名）と'omina'（前兆）と'numina'（お告げ）との間の密接で触き難い関連をはのめかすものである。

前号では、禁忌語の概要を述べておいたが、この号では、特に未開人の間に見られる「動物の名前に対する禁忌」を選んでみた。参考とした書物は、A. Meillet の 'Linguistique Historique Et Linguistique Generale' と W. Havers の 'Neuere Literaturzum Sprachtabu' が中心となつている。

「殆んど文明化されていない人々の言語は急速に変化し、ただ一世代の間にさえ見分け難くなるとしばしば言われる。この観察の証明としては、『彼等の用いる言葉は、特に急速な変化に服してはいないのであり、ポリネシアに於ける如く、多くの場合堅持ささえもつている；しかし一方旅行者が二度目に訪れた時には、数年前彼が自分に教えさせた語は、タブーによつて廃止されているのを見出す』という事実が唯一のものである。タブーの慣習は、印欧語を話す人々の中に、古い時代から存在していたと想像される。これは人々がその消失の原因を説明することが出来ない単語を説明する手段となるであらう。」（Meillet）動物の名前は、そのよい例となるであらう。

1. 熊<ours>

<ours> は歴史時代の初めに、即欧語によつて占領されていたあらゆる領域で共通であつた。skr. rksah, gr. arktos, lat. ursus, を初めとし、persan, afgh, irl. arm, alb. etc この様な言葉には熊<ours>と表わす単語が残存しているのであるが、ゲルマン語、スラブ語、バルト語では完全に欠けており、迂言法（periphrases）や形容語

(qualificatifs) によつて置き換えられている。serbe. *médryed*, slov. *médved* <蜂蜜を食べるもの>, lit. *lokys* <大食家>, v. pruss <不平家>, v. angl. *bera* <褐色のもの>。この様な呼称はヨーロッパの北(エストニア, フィンランド)の人々にもみられる。彼等は、その名によつて熊と呼ぶのを避けて、<年老いたもの>, <蜂蜜の威風ある足>, <毛むくじやらのもの>, <巾の広い足>, <白アリを食べるもの> etc という。一般的方法として最もよく行われる語原のタブーの一つは、狩猟期間中、人が狩る獣の名前に基く。それ故、人々は、スラヴ語、バルト語、ゲルマン語に <ours> を表わす名前の消失をひきおこしたのはタブーであると考えた。実際熊は至る所に生棲しているが、しかも名前が消失しているということは、その原因としてタブーの存在を認めるのが正しい。<Meillet>

では Meillet によつてタブーによる消失と認められた熊を示す語は、何故タブーという規制を加えられたのであろうか。W. Havers によると、狩猟動物の名前の禁制の原因として、動物は人間の言語を理解する。それ故彼はその名を耳にすると、人間が彼を捕えんとしていることを予感し走り去ってしまう。そのため狩人達はその動物の名前を言うことを禁制するのである。しかし、一般的に言つて、熊の宗教に於ける役割からくところの印欧人の宗教的恐れ (religiöse Scheu) がその大きな原因であらう。勿論他にも原因として森の王である熊に対する純粹に人間的な不安 (Angst) も自明なることである。

2. 蛇 <serpent>

蛇はその名前が最も頻繁に禁制される動物のうちの一つである。

<serpent> の印欧語の名前は、方言的な広がりを示し、地理的に近い僅かの数の言語にのみ存在する。1. skr. *áhiḥ*, gr. *ophis* (東洋やギリシャの言葉) 2. got. *nādrs*, lat. *natrix*, irl. *nathir* (正確に西洋の言葉) 3. lit. *angis*, lat. *anguis* <環状に巻いたもの> (インド=イラニアン語やギリシャ語には知られていない中央地方の言葉)。更に蛇は、形容辞 (epithites) によつて示される。4. skr. *sarpāḥ*, lat. *serpens*, gr. *epeton*, <這うもの>。この3つの語は、元来、蛇を言い表わすための語が存在するのに、<這うもの>によつて蛇を表わすのは、そこに何か特別な理由があるはずである。5. v. sl では <この世のもの>という迂言法に依頼しているのであるが、これは、蛇を示す名詞がある条件のもとでは禁止され、その名前の代理であつたという事実が考えられる。6. lit <緑色のもの>。又蛇のもつ有害なデモニック性格は、russ, *chudaja* <邪悪なもの>という代理の名詞を使わせている。7. ウクライナでは断食の間 *ona* <sie 彼(女) 彼ら> ^v*čirvak* <虫>, かくて蛇も又「靈魂をもつ動物」として宗教的恐れ *religiöse*

Scheu から本来の名前が禁忌されている。

3. 密 蜂

密蜂の古い名前は 語根 bhei に k-, t-, n- がついて形成されていた。; ahd. bi-ni (ntr), irl.(bhiho から) bech, その他 abg. lit, にもみられる。がインド=イラン語, アルメニア語, イタリア語, ギリシャ語では古い語はなくなっている。フィン・ウングリア語では lind (鳥) に移しかえられた表現 mezi-lind <密蜂の鳥>がある。

Havers によれば、所謂 Bienestock は Vogelbaum (linnu-pu) <蜂房>で、Bienenhaus は Vogelgarten (linnu-aed) <密蜂の巣箱>で示され、迂言的表現による古いものの代用も、タブーに帰するものであるとされている。モンゴル人にとって密蜂や雀蜂は“靈魂をもつ動物”としてみなされ、殺さぬことが慣習となつている。コーカサスでも密蜂に対する表現は本来の名前でなく禁忌表現であつて、これらをひきおこす原因も re-ligiose Schen と考えられている。

4. ねずみ <souris>

ハツカネズミ<souris>の印欧語の名前は、よく知られている対照によつて確立される。skr. mūs, per. mūs, lat. mūs, gr. mos, etc. 一方この<souris>を表わす名前はその動物の“色”に関係する語によつてとつてかわられた2つの言語派では欠けている。

1. バルト語派 lit, pelê <灰色(のもの)>

gr. polios <黒ずんだ灰色>

2. ケルト語派 irl, luck <黒い> etc.

スウェーデンでも、de små gra <小さい灰色のもの>とか、白ロシアでは、クリスマスの間 Pannocki <小さいかわいいお嬢さん>とか言われる。ロシア語では、ネズミのもつデモンの性格から3つの表現<不潔なもの>,<はうもの>,<嫌悪すべきもの>が行われる。この際には、ネズミのデモンの性格、悪魔、魔女と関係あるもの、靈魂をもつものとしての観察から代用語で表現されるのである。(Zelenin)

5. 狐 <renard>

狐は靈魂をもつた動物であるので恐れ Furcht を感じさせ、そのデモンの性格は、きつねは危険なものであるという神話的觀念に、鴉の掠奪に対する恐れが入りこむことから生ずる。例えば、bayr. Henading <鴉の掠奪者>から遂には無意味の Ding <物>へと表現が変化していった。狩人達にとっては、狐は獲物であり、その名を聞くと、狐は理解して逃げ去

るという迷信があり「かくし言葉」 Deckwörter で示される。① Pedro, Löinl といった洗礼名、② rosa, geber, rote の如き色の名前、③ 家系名 etc. 隠すことを目的とした一般にはなじみのない名前は、色による名前と同様好まれる。例えばフランス語の renard は、今までの goupil を打ち負かし、民衆に非常に好まれ、す早く流行したのである。

6. 狼

狼に対する名前は、印欧語の基本型を何れもたず、屢々名を挙げられる様々の形は、古いタブーの觀念から明らかにされる。先史時代から語の魔力が強く作用していた。しかし、gr. lukos lat. lupus, illyr. lukk or lupp にわずかに加よつた点がみられる。以下様々の表現を挙出してみると、ドイツの植民は、Holzgangel <森の揺軸?>, 白ロシア人はクリスマスから公願節まで Koljadnik <クリスマスの歌手>, frz. pied-gris <灰色の足>, deutsch. Isengrim <灰色の外観をもつたもの>, ir. cú allaid <野生の犬>, lit. žvėris <動物> etc がある。

Rieger によれば、「17世紀のアイerlandの植民に於ては狼をGevatter <代父>と名づける習慣があつた。ここでは人には、動物を捕えることを欲するために、家系や代父母達の名前を動物に与えたのであつて恐れからではない。」と説明されているが、一方Spechts は、;「これらの代用語は猛獣としての狼に対する恐れ Furcht によつて喚起されるのである。何故ならば、狼はデモニック性格をもつ動物で、体の中に潜む悪魔や他の悪い靈魂がからを破つて出てくるのである。」その証拠としてウクライナの代用語 Poganin や Poganeć <異教徒>を Zelenin は挙げている。又アルメニア人民衆の迷信、暗黒の邪慧の力の同盟者としての狼は光を恐れる。閃光は全てのデモンと共に狼を破壊する。それ故、閃光の象徴—ひうち石や礮—は狼に対する防禦物として役立つ。故にアルメニア人は<火うち石>は、gaylaxaz = Wolfstein <狼の石>と言われ、南スラヴ語では、Kamenjak = der Steinerne と言われる。しかし狼のデモン性格と、この危険な動物に対する様々の代用語は、狼に対する印欧語の名称が屢々衰えたという事実と一致しないようである。何故ならば Zelenin の言うように、;「ウクライナの人々は狼と djadko <叔父さん>と名づけ、レットランドの住民は、snots <嬌>というように、危険な物を愛称で呼ぼうとする傾向がある。狼を gevatte と呼ぶことによつて、自分の一族とそのものを結びつけ親戚関係者として保証し、その尊敬すべき特性に關与するためにその名を呼ぶ。」という事実や、Schrader の ;「狼の印欧語の名称でもつて屢々人名が構成されているのは、恐らく動物の特性を、その生まれた子にも同様に望むためである。serb. の vuk という名は恐ろしく危険に満ちた名であるが、子供の死で苦

しめられた家族は、新しく生まれた子に Vak と名づけることによって、前に子供を奪った譚女 (Hexe) は、もはや防禦の力がある名前を敢えて襲いはしないであろうから。」と述べていることから、Havers は結論として、「狼の名のタブーは、猛獣としての恐れ Furcht によってのみ条件づけられるのではなくて、神秘的危険や、この動物のもつデモンの性格にもよるのである。又恐らく若干の印欧人には、ある種の宗教的恐れ religiose Scheu が存在したであろう。」

6. いたち

いたちは、そのデモンの性格に対する恐れと、それにたぐう禁制の対象の血を好むが故にその名前が避けられる。

frz. belette, itl. donnola <お嬢さん>, sued. lilla snalla <きれいな少女>, dan. kjonne <美しい> alt Eng. fairy <精>等の愛称で表現してやわらげる。

7. うさぎ

うさぎはデモンの性格をもつ動物としてみなされると共に、神的な存在をもその中にみられる。とりわけ月一死んだ人の魂の住家一と関係があると考えられる。それ故共通印欧語の言い方には欠けており、Ahd. haso, lat. canus, lit. sirvis, gr. lagos いずれも <灰色の>の意,と思われる。

8. (ハリネズミ)

人間の役に立つ動物、即ち家畜にも、名前の禁制がしかれる。Igel に対する印欧語の名前は gr. ker[ke:r], lat. her であるが、gr. ekinos, ahd. igil, lit. ezys <蛇の大食家>は Igel を表わす同義語である。危険な蛇に対する戦いの最良の同盟者であるので、その助けを失わないように本来の名前を言わないのである。そうしないと、の感情を害すると考える。人々は尊敬し、畏敬の念 hrfurcht を抱く“人”、“動物”、“病氣”の名前をうかつに言うことは、これらを害することであるとする、ここには名前が、その名前をもつものの一部とみなす未開人の心性が現われている。

以上全体をふりかえってみた場合、Havers は、禁忌の原因を religiose Schen, (dämonisch Charakter), 或は Furcht, Ehrfurcht という語で説明している。Wundt によれば、「聖性の観念と、不浄忌避の観念の二つの相反する観念が、タブーの概念の中に結合している。これら観念は、恐怖観念によつて結合している。実に恐怖の一種を、われわれは畏怖と呼び、他を忌避という。さてタブーの観念の歴史によると、畏怖と忌避とがこの場

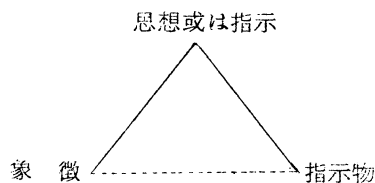
合、同じ源から生じたことは、無論である。後代に忌避を生じたものは、トーテム時代に、主として畏怖あるいは要するに恐怖の対象であつた―即ち畏怖と忌避が、未だ分れなかつた感情の対象であつた―最も簡単な語「恐怖」Scheu が示すものは、その起源の最も早いものでもあつた。畏怖 Ehrfurcht と忌避 Abscheu は、恐怖 Scheu から発達した。」と述べてあるが、これと、考えあわせてみると、タブーの概念も、より一層明確になる。

タブーの原因を心理学的な立場からみた場合、以上の様な結果が出るが、言語学的な立場から見た場合はどうであろうか。

タブーの起源は、名前と事物と同一視することにある。悪魔という名前は、悪魔そのものであり、人名は、その人の体の一部である。言語的タブーは、思考の前論理的な形態にもとづいていゝる原始人の言語に於て、あらゆる神聖な、ないしは危険な名前を禁じてしまう。それ故 Havers が挙げている如く、1.動物の名前だけでなく、2.身体の部分の名前、3.人名、4.病気、死者の名前、5.神、悪魔の名前、6.太陽、月の名前をタブーとするのである。この未開人の心性が結果的に見た場合、意味の変化をさせているのは、bear というのが＜樹色の＞という意味から＜熊＞を表わすようになったことから自明である。Ullmann は「意味論」の中で、意味変化の究極の原因として禁忌の力をその1つに挙げている。

しかし現代禁忌され、他の婉曲的な表現でおきかえられている原因をみると、名前と事物の同一視といった前論理的段階ではなくて、心理的な連合過程に基いているのであることがわかる。

Ogden - Richards の例の三角形によれば



未開人の間にみられる現象は、象徴、即ち名前と指示物との想定されたる関係（点線の部分）を同一視してしまうことであるが、現代タブーされるのは、象徴と指示、即ち名と意義の間の連想が語に働くからである。この連想をひきおこす力が、タブーを生ずる、ひいては転義を生ずる貯蔵所を与えるのである。

かようにしてみると、同じ禁忌語の範疇に入るといつても、その根底にあるものは、随分異つてゐる。もつとも S. I. ハヤカワ氏は、現代にみられる「言語的タブーのあるもの、特に宗教的なものは、明らかに人間の言葉の魔力への初期の信仰に起源をもつ。しかし全てのタブーを言

語の魔力で説明することはできない。」と述べているが、確かにこの言語の魔力が（Havers も言う如く）タブーをひきおこす原因の1つであると思うと共に、横道にそれるかもしれないが、この語のもつ魔力が、現代一般意味論でも取り扱われている如く、多くの実際場面で作用していることはみのがせない事実である。その点日本放送協会編「言葉の魔術」は、非常に興味深いものである。

three Ranks 論

横 山 悌 志

語の分類；

或る語を実詞、形容詞その他どの語類に入れるべきかという問題は、個々の単語の問題であるが、この問に対する何らかの解答を我々は辞書に見出すことが出来る。しかしどんな語も語群も語の一部として扱われるときは、実詞として見なすことに注意しなければならない。

例えば；

- ・ Your late was misheard as light .
- ・ His speech abounded in I think so's .
- ・ There should be two I's in his name .

従属関係；

Terribly cold weather（ひどく寒い天気）という結合に於いて、最後の語 weather は明らかに主要な概念であるから、Primary「一次語」と呼ぶことができ weather を規定する cold は Secondary「二次語」、cold を規定する terribly は Tertiary「三次語」と呼ぶことができる。ここで三次語は別の語（もつと複雑な語群において）に限定されないのだろうか、という疑問を抱く、この疑問に対して、Jespersen は The Philosophy of Grammar の中で「三次語は更に別の語（四次語：quaternary）によ